風の末裔シリーズ・４th シーズンの１０

～白蓬(しろよもぎ)～

©西風そら

http://nisikaze.sakura.ne.jp

「まったくソラは、痩せ我慢が過ぎるんだ！」
オレンジの瞳の娘がズケズケ言いながら、大きな水筒を引ったくった。
「大丈夫ですって、水汲みは僕が行きます」
「だから、そういうのを痩せ我慢って言うの。水くらい私がちゃちゃっと汲んで来るから、大人しく横になってろ。後、薪拾いも私らでするから、シドはソラの側にいてくれ。行こう、シンリィ」
谷を一気に下るルウシェルの後を、羽根の子供がえっちらおっちら着いて行った。

夜営地で水を汲みに行こうとしたソラが、立ち眩(くら)んで屈み込んだのだ。もともと体調を崩していたのを、ちょっと無理して発ったんだった。
「僕は大丈夫だよ」
「いいから休んでろ」
シドは一番に毛布を引っ張り出してソラに掛けてやり、手早く天幕を張った。
「明日頑張って国境の森まで飛ぼう。あそこなら暖かいし夜営しやすい洞穴もある。そこで二、三日休もう。明日の為に、今日は早く休んで体調を整えておけ」

「…うん…」
ルウシェルは来る時の旅路に比べて、別人のように頼りがいのある子供になっている。
「そのせいかな」
安心して、身体がちょっと緩んじゃったのかもしれない。

蒼の里を発ったのは昨日の朝。
四人は、低い山陵を白樺の木が覆う尾根筋で、夜営していた。西風の里との往復は何度かしているシドとソラだが、ここに降りるのは初めてだ。夜営ポイントは大体決まっているけれど、今日はソラの不調を見て取ったシドが、予定より早く降下したのだ。初めての場所の不安もあるのだが…。
「嫌な感じの森だ。鳥の声もしない」
尾根筋で開けている筈なのに、モヤが立ち込めて妙な閉塞感がある。シドは手近の枯れ枝を集めて火を起こした。我慢して夜明かしして、明日早く発とう。
「?!!」
白樺林の奥の茂みが大きく揺れた。
「……・・・」
「どうした?」
一点を見据えて動かないシドに、ソラは半身起こして聞いた。
「いや…、何か、大きめの生き物がいた。鹿とかアナグマなら構わないんだけれど…、ちょっと見て来る」
シドは長剣を取ってソロリと立ち上がった。野性動物にしては、動きにただならぬ物を感じたのだ。
用心しながら、さっき白いモノが過(よぎ)った場所の地面を調べた。四つ足の足跡らしき物がある。
「大きさの割りに深さがない。何なんだろう?」
「シド!!」
ソラの緊迫した声。慌てて剣の柄を握って引き返す。

夜営の天幕を囲んでいたのは、十人ばかりの狩猟の出で立ちをした山岳部族だった。
「お前ら、どこの者だ?! 何をしている?!」
天幕の下で剣の柄を握って身構えるソラに対して、石弓を向けているが、弦を一杯には引いていない。あまり乱暴な部族でもないんだろう。シドは剣の柄を離して、両手の平を彼らに向けた。
「僕らは旅の者です。砂漠の西風の部族。病人がいるのでここで休んでいるのです。ここは貴方がたの土地ですか?」
「ああ、西風の…?」
鷲(わし)の羽飾りを首に掛けたリーダーらしき男が、三頭の

馬の毛並みを見やって、仲間を振り向いた。
「蒼の一族じゃない…」
一同肩を下ろして安堵の顔をするのを、シドとソラは素早く見て取った。
蒼の一族は草原の頂点に位置する存在だが、敵対するモノが皆無って訳でもない。しかしこんな草原近くの平凡な山中に、マークはなかった筈だ。
鷲羽の男が進み出た。
「我等は向こう三峰（さんぽう）を根城とする三峰（みつみね）の民。病人がいるなら我が部落に来られてはどうか？　質素だが、医師もいる」
好意は有り難いが、先程の様子が引っ掛かる。どうしたものか…。二人、顔を見合わせている所に、灌木を掻き分けて一人の少年が飛び込んで来た。
「隊長！　奴を見た！　谷へ降りてった！　早く…」
シドとソラを見て言葉を止める。
「そうか、よし！　皆、行くぞ。ヤン、この方達を部落へ案内してくれ」
緊迫した感じで、先発の二、三人が谷へ駆け降りた。
「あの、僕達、いいです。明日早く立ちますから…」
二人は何か不穏な物を見て取って、用心した。

「いや、奴が近くにいるなら、尚更、夜営は危険だ」
鷲羽の男は自分も谷に身体を向けながら言った。
「恐ろしい森の魔物なんだよ！」
さっきの少年が興奮した様子で叫んだ。
「魂を吸い取られちゃうんだ！」
二人は顔色を変えた。谷に、ルウ様とシンリィが!!
「僕も行きます！　連れが水汲みに降りているんです！」
シドが谷に向けて二、三歩進み出た。
「僕も…」
ソラが立ち上がるより先に、二人は石弓の切っ先に囲まれた。
「…!!　何を…!!」
＊＊＊
「何をするんです?!」
「魔物は、ただの魔物ではない」
鷲羽の男が強い口調で言った。
「山神に近い性質を持つ。怒りを買うと、取り返しつかぬ事となる。我等の作法と鎮め方があるのだ。通りすがりの者に半端に手出しされては困る!!」
「しかし！」
「そなた達の連れは、我々が責任を持って保護する。一人か?」
「……」
シドは観念した。確かに、その土地その部族の流儀に半端に首を突っ込むべきでないのは、蒼の里で教えられていた。
「子供が二人です。十歳の女の子と七つの男の子…」
「子供…」
皆が弓を降ろし、鷲羽の男は眉間の縦線を和らげた。子供を心配して慌てるのは当たり前なのに、それを責めて悪かった…って感じだ。
「我等は谷の地形に長ける。すぐ見つけられるだろう。心配はいらぬ。安心して部落で待っていてくれ。ヤン、この方達を手伝うんだ」
男達は急いて谷を降りて行った。不安顔のシドに、ヤンと呼ばれた少年がそっと話し掛けた。
「あの…、天幕たたむの、手伝います」
「あ、ああ…、僕ら、どうしても君の部落へ行かなきゃ駄目か?」
「ええ、魔物が徘徊している時は、僕も狩りから外されるんです。危ないから来ちゃ駄目だって」
「魂を吸い取られるって?」
「うん、皆、そう言う…」
「吸い取られた人は、どういう風になるんだい?」
「あ、ううん…、まだいないから分かんないけど…」

「……」
大人が隠しておきたい秘密を守る為に、子供を脅かすのに使いがちな言い訳だ。鷲羽の男の言っていた事は筋が通っているが、強引なこじつけにも感じた。多分、全部が本当じゃない…。
「さっき、魔物を見たって言っていたな」
「うん、見たよ」
「どんな姿なの？」
「白っぽくて、大きくて…、早過ぎて細かい所までは見えないんだけれど」
「白くて、…早い？」
「そう、ツバメみたいに、木の上をヒュンヒュンって谷へ向かって。僕は見るの二回目だけれど、二回とも目の端から端へ、ビュン！　って感じで」
「……」
謎の白い生き物なら、さっき自分も見た。何かいるのは本当だろう。だが、自分の勘では、魔物特有の邪気は感じられなかったのだが？
この子を困らせるのも何だし、取りあえず従おうか…。出来れば荷物をたたんでいる間にルウ様達に戻って欲しい。胡散臭い部落へは行かずに、無理してでも別の所へ飛んだ方が無難だろう。
シドがわざとノロノロ天幕をたたみ出した所で、黙っていたソラが口を開いた。
「ヤン、君は、幾つ？」
「十二です。まだ成人の歳じゃないけれど、目が良くて動物を見付けるのが得意だから、先月から狩りに同道しているの」
少年は十二にしてはやせっぽちだが、山岳民族特有の柔軟で長い手足をしていた。赤毛がかった黒髪の下の真っ黒な瞳は、自慢なだけあって清く澄み、一切の濁りはない。
「十二…、災厄の時代は覚えている？」
シドはちょっと手を止めたが、気にしていない振りをして荷造りを続けた。
「小さかったけれど覚えてます。僕の妹二人も亡くなったし…」
この地に黒死病渦がやって来たのは大体八年前…それから二年は地獄だった筈だ。二人も蒼の里で仕事をしながらあちこちでその爪痕を見た。
「そう、ごめん…、辛い事を聞いてしまったね」
「いえ…、小さい子供は一杯死んだから。僕が無事だったのは奇跡だって言われた」
「そう…」
「それに、この辺りの部落は他所の土地に比べると、ずっと被

害が少なかったらしいです。他所では全滅した部族も一杯あったって」
「へえ…？」
「身辺を清めて不浄を遠去け、小動物を部落から追い出して、水は沸かして、ってちゃんとやったら、発病するヒトが少なくなったって」
「そうか、君の部族の医者は優秀なんだな。正しい知識があったんだね」
「ううん、うちのお医者じゃない。外から来たヒトが教えてくれたって」
「…誰？」
「んー…、名前は知らない。僕、病人のいる区域には近寄れなかったし…。さっき言ったのも、だいぶん後で母さんに聞いて初めて知ったの。だから僕なんかは感染しなくて済んだんだって。そう、一回、窓から知らない他所のヒトを見たから、きっとあのヒトだと思う。水色の髪が腰まで長くて、背中に鷹みたいなカッコイイ羽根があった」
「…!!」
何となくモヤモヤしていたモノが、はっきりした気がした。
黒死病渦の時代、カワセミ長がこの部落を訪れていた。それだけなら特別ではない。あの時代、カワセミ長は何十の部落を訪ねては、防疫の知識を伝布していた。
シドは荷造りの手を早めた。
カワセミ長のお蔭で災厄を乗り切ったのなら、恩人として詳しく語り継いでもおかしくないのに、この子供は名前すら知らない。蒼の一族に何か後ろめたい感情があるから、口をつぐんでうやむやにしているんだ。そう、多分、彼らは、病気の知識以外の事に、大きな興味を持ったんだ…。
「そういえば、君の部落で一番偉いヒトは、さっきの隊長殿かい？」
ソラがまた、何気ない風に聞いた。
「ううん、一番偉いのは族長だよ。でも、もうおじいちゃんで、身体がしんどいって言って、部落のほとんどの事を、隊長に任せてる」
シドは荷造り終えて馬にくくりつけた。
「さ、ヤン、案内しておくれ。そして、部落に着いたら一番に族長に会わせて欲しい。なるべく、早くにね」
「…？…はい…」
＊＊＊
山中の尾根筋より少し下った台地に、その部落はあった。
奥の棚畑に桑が植えられ、中央の広場を囲んで、茅ぶき屋根

に板壁の家屋が並ぶ。質素だが、所々に凝った造りの装飾品が見える。歴史は古いのだろう。
昔は栄えていた場所が、今は彗星の尾のように寂れている。ちょっと前の西風の里と通じる空気があった。
広場の奥、正面に間口の広い大きめな建物があった。部落長ってのは大体ああいう所にいる。
「族長はあそこ?」
「ええ、今、繋ぎを取って来ます」
「うん、頼むよ」
二人は馬に水を与えながら待った。
「ソラ、大丈夫か?」
「うん、よろけていられない。駆け引きは僕の役目だ」
「身体がもたなかったら、探求は明日にして、休ませて貰ってもいいんだぞ」
「……族長次第だな…」
ヤンが駆けて来た。
「まずはゆっくりお休み下さいって。族長は明日会われるそうです」
「……」
ソラが溜め息付いた。どうやら休んでいられないようだ。あの押しの強そうな隊長が帰って来てからじゃ駄目だ。一人で会うのを拒む弱腰の族長に探りを入れるなら、今しかない。
「そう、でも、族長殿に挨拶もしないで世話になる訳にも行かない。一声だけでも掛けて来るよ」
「えっあの……」
「僕達の馬には構わないでね。そいつら、腹帯に触ると噛み付くんだ」
二人は、馬から後退りする子供の横をすり抜けて、スタスタと族長のいる建物へ歩いた。
「ごめん、西風の里よりの旅行者です。族長殿にご挨拶したい」
暫く沈黙があって、戸口が開き、丸顔の幼児が顔を出して、奥へ声を掛けた。
「おじいちゃま、青い髪のヒトよ」
奥で動揺の気配がした。
「幼子を正面に立てて、こちらの気勢をそぐつもりか。せこ過ぎるぞ」
シドが小声でぼやいた。
「やあ、おチビちゃん、おじいちゃまはそこかい?」
ソラが軽やかに言って、子供の頭を撫でながらヒョイと室内に滑り込んだ。
室内には分厚い羊毛の敷物があり、その奥の猫足の肘掛け椅

子に、長らしき翁が慌てた感じで腰を浮かせていた。二人は前に進んで両膝付いて礼をした。

「目通り有難うございます。旅空で難儀の身に手を差しのべて下さったご厚情、感謝致します。一言御礼(おんれい)申し上げたく…」

「いやいや…、お困りの時は助け合うのが道義…」

長は、ソラが言葉を終わらない内に、忙しなく長い髭をしごきながら言った。

「可愛いらしいですね、お孫さんですか?」

ソラが幼児を見ながらわざとゆっくり喋った。

「子供はどこの部族でも宝ですからね。災厄の時代以来…」

「お母さんの所へ行っていなさい」

翁に言われて幼児は外へ消えた。

「随分質の高い養蚕をされているのですね。見た事もない美しい色の糸が干されていました」

ソラがいきなりあさってな事を言い出した。シドは黙っている。この外交官がうんと遠くから、ジガ蜂のように核心に迫る様を、何度も見ている。

「あ、ああ…。昔からの我が部落の伝統だ。今でこそ寂れてしまったが、モンゴル帝国が栄えていた時代は遠く東方からも我が部落の織物を求めに来る者で賑わっておった」

族長が顔を和らげて饒舌になった。その事については幾らでも喋りたそうだ。

「養蚕をやっている部族は理知的で『程度が高い』と言われています。三峰の民は他と一線を画した、優秀な伝統をお持ちなのですね」

『程度が高い』なんて言葉は蒼の里では使わない。しかし、そういう言葉を好む部族の前では、ソラは使う。そこから生まれる優越感の波が大きい程、彼らの警戒の堤防を簡単に乗り越える。

「そうじゃ。絹織物の交易が盛んな頃は、皆、この辺りで一番の暮らしをしておった。他の部族はいつも羨ましがっていた」

「返すがえすも悔しいのは、黒死病渦で打撃を受けてしまった事ですね。僕が神なら、三峰の民のような優れた部族からは、災厄を免(まぬが)れさせるのに」

「ほお…それほどでも…」

それほどでもと言いながら、満更でもなさそうだ。

「神はえこひいきです…」

ソラはスウッと餌を蒔いた。族長は簡単に食い付いた。

「そうじゃ！　神に愛され、黒死病を免れていた者は、他にいた！」

＊＊＊
「それって…？」
ソラが針の狙いを定めた所で、戸口が開いて鷲羽の男が入って来た。
「ごめん！　ここに居(お)られたか！」
内心ガッカリな二人だったが、平静を装った。
「先程はお世話になりました。子供達は外ですか？」
「それが…、見つからなかった」
鷲羽の男は、岩みたいな眉間にシワを寄せて言った。
「えっ!!」
「見つからなかったって、そんな、馬鹿な!!」
シドは外へ飛び出した。
外はもう薄暗く、先程の男達が三々五々、狩装を解いて休んでいる。皆、ヘトヘトな感じだ。『魔物』も取り逃がしたんだろう。困った顔のヤンと目が合った。
「僕が行く！　直ぐ行く！」
シドは泡を食って、青毛に駆け寄った。
「待って、シド」
後から建物を出たソラが、隊長を振り向いた。
「見た所、複雑な谷でもありませんでした。地形に長けた貴方がたが見付けられなかったとは不思議です」
「疑うのか！　我等が、何の為に嘘を言う?!」
「シンリィの羽根に興味があるんだろう?!」
ソラが、（あ、このバカ…！）って目をしたが、シドは言ってしまった後だった。
「お前等、やはり蒼の一族か?!」
男達が立ち上がって二人を囲もうとした。
しかしソラの方が早かった。核心を突かれて怯(ひる)んだ隊長の胸元に一瞬で入り込んで、その手首を掴んだ。
「最初に言った通り、西風の者です。ですが、蒼の一族とは眷族で懇意です」
隊長に顔を近付けて、喉元に息を吹き掛けるように言った。
「僕は、西風のソラ。西風の者の能力を甘く見ない方がいい。この手を通して貴方の頭の中をどうする事だって出来る。やって見せようか？」
隊長は恐怖の顔をして手首を振りほどいた。その隙にシドが彼の背後を取った。大立ち回りをやらかすつもりはない。大将を押さえておくのが一番だ。
だいたいソラは優秀な接触感応者だけれど、頭の中をどうにかするなんて有り得ない。とんだハッタリだ。

「子供達はどこです?」
ソラはもう一度鷲羽の男に迫った。
「本当に知らないんだ。いや、一度は見付けた。青い髪の女の子と、赤い羽根の男の子。しかしこちらを見て逃げ去ったのだ」
「まさか…!」
シドの言葉をソラが繋いだ。
「正確には谷の…、どこか、洞穴に追い詰めて…、シンリィが怯えて奥へ逃げて、ルウ様が追い掛けた…。貴方がた、よっぽど子供を脅えさせる『探し方』をしたんですね」
「…!!」
鷲羽の男が、いつの間にか掴まれていた腕を再度振りほどいて、気持ち悪いモノを見るようにソラを見た。
「その洞穴…どんなんだ? 危険じゃないだろうな?」
シドが背後から鷲羽の男を押さえているので、誰も身動き出来ない。
「そう危険ではない筈だ。部落の子供が遊び場にしている位だから」
男は観念して話し出した。
「入り口が狭くて大人は通れないが、中に行くほど広がって、かなり奥まで入れるって話だ。子供達は呼び声が届かない程、奥へ行ってしまったのだ。今は入り口に見張りを立てている」
「ふうん、それで僕達をうまくごまかしている間に、シンリィを捕まえて羽根を毟(むし)ろうってのか?!」
シドは自分で言った事に興奮して、語尾が荒くなった。
「話して貰えませんか? 貴方がたは、カワセミ長を見て、羽根に興味を持った。ただそれだけじゃないでしょう?」
ソラが冷静に、族長を見やった。老人は離れた所で、オロオロしている。
「わし等は…わし等は、羽根が欲しいだけなのだ。黒死病をはね除ける、護りの羽根が」
「叔父貴!」
鷲羽の男が圧し殺すように叫んだ。ソラはシドに目で合図してから、男の前を離れ、族長の方に歩いた。
「皆を鎮めて下さい。貴方と隊長殿だけに伺いたい」

族長の家の中。松明の明かりに照らされる四人。
「わし等は知ってしまったのですじゃ。あの方が災厄の地を楽々渡って行けるのは、背中の羽根に護られているお陰だと」
「それは僕らも知っています。でも、あの羽根は、蒼の一族みんなにある訳じゃない。先祖返りで、ごく稀に授かるモノです。カワセミ長はその役割を心得て実践していた。神のえこひいきなんて言われる筋合いはありません」

「それはどうかな?」
鷲羽の男がふてくされた感じで腕組みして、柱に寄り掛かっている。
「なあ、叔父貴…」
「ああ…」
族長はフサフサした白眉の下から目を光らせた。
「ワシは子供の頃、カワセミ長を見かけた事がある。昔のあの方には、羽根が無かった」
「え…?」
二人は顔を見合わせた。それは初耳なのだ。
「分かるか? 羽根は生まれ持つ物ではない。何らかの方法で手に入れるのだ」
二人が黙ったので、鷲羽の男は勝ち誇ったように言った。
「蒼の一族と懇意と言ったが、隠されている事があるようだな!!」
＊＊＊
鷲羽の男は高揚した声で喋り続けた。
「そこで、我々は調べた。我が村の歴史は古い。あちこちの古い部族と繋がりがある。俺は、古老の住処を訪ね歩いて、書物を繰り、伝承を聴き、繋ぎ合わせた。そうして幾重にも重なる共通の記号が浮かんで来たのだ」
今や西風の二人は表情を止めて自分を凝視している。男は得意の笑みを浮かべた。
「聞きたいか!!」
「……!!」
悔しさと焦りで言葉に窮したシドは、相棒を見た。ソラは薄灰の瞳を瞬きもせず、男から目を逸らしていない。多分今、頭の中で様々な計算が交差している筈だ。
「…なる程…ね…」
少しの時間の後、ソラが落ち着いた声で言った。
「貴方の脳みそが筋肉で出来ているんじゃない…って事だけは、解りました」
「な…! なにぃ!!」
男は額に青筋立てて、目を剥いた。
「確かに、聞きたいか? と問われれば、聞きたいですね。思わず『教えて下さい』って言っちゃう所でした。でも、貴方の知っている事ってどの程度なんですか? もしかしたら僕達の知識の端の端程度かもしれない。そんなのを交換条件に、子供達をおびき出せなんて言われたら、堪ったモンじゃない」
抑揚なしに一気に喋るソラを、シドは動揺を隠した横目で見た。羽根に関しては自分達はほとんど何も知らない。ハッタリもいい所だ。

「お前達は羽根が後から手に入れる物だという事すら知らなかったではないか」
「ええ、ある日突然生えて来る物ですから。カワセミ長が、いつあの姿になったのかは知りませんでした。はぁ…、どれだけの事を知っているのかと思ったら…。その程度の知識、ひけらかす価値もない。僕達、洞穴の二人の所へ行きます。行こう、シド」
ソラはつっけんどんに言い捨て、出口に向かった。シドも慌てて従った。
「ま、待て…!!」
男の慌て声よりも、族長のしわがれ声が二人を引き留めた。
「待ってくれんか…?」
老人は肘掛け椅子から立ち上がって、よろよろと歩み寄る。
「わし等は…、多くを失った。多くの、愛する者を。黒死病を克服する方法があると分かれば、飛び付くのは当然だろう?」
二人は立ち止まって振り向き、老人を見た。
「頼む…。協力してくれんか? あんたらの連れに羽根を持つ者がいるのなら、その者に聞きたいだけなんじゃ。『カゼイズルヤマ』の場所を…」
「……シンリィは、知りませんよ…」
ソラはツラッと言い放った。
「『幾重にも重なる共通の記号』ってそれだったんですか? あんな所は核心でも何でもない。見当違いもいい所だ。シド、行こう」
そう言い放ち、一人でスタスタと外へでてしまった。シドが急いで追い掛ける。
「おい、ソラ、待てよ」
「…シド…」
「もうちょっと聞き出した方が…」
「…ゴメン…シド…」
「どうした?」
「…限界……」
「えっ?」
ソラはフウッと前のめりに傾いた。慌てて支えた肩は、氷のように冷たかった。
「ソラ!!」
「馬に乗れそうにない。僕がぶっ倒れても、色々知っていると思わせておいたから…身柄は、安全だ…。だから…ルウ様の……所に……行ってく…れ……」
だんだん力をなくしながら、ソラは両膝地面に落とした。
「僕に……かまけてたら……怒るぞ……」

崩折れてしまったソラを支えて、シドは左右を見た。
鷲羽の男が建物から出て来る。馬を繋いでいる場所はすぐそこだが、外で待機していた男達がワラワラ集まって来た。確かに、ここで身動き取れなくなったら、こいつのハッタリが水の泡だ。
「ソラ、ごめん…!!」
シドは相棒を地面に横たえ、青毛の所に走った。
鞍は乗ったままだ。一気に飛び乗り、上空に飛び上がる。地面では松明の元、空を見上げる男達とソラを囲む男達が半々だ。
「……ごめん…」
ソラが不調だったのを失念していた。読心の術を使った時、既に倒れる寸前だったんだろう。僕が自由に動けるように、倒れる前に自分の保身を図っておいたんだ。今、僕がすべき事は、二人を助けに行く事！
しかし、シドの脳裏に、色んな単語がかすめた。
・・・羽根・・・蒼の一族が隠している事・・・
カゼイズルヤマ・・・・
シドはかぶりを振った。その部族にはその部族の秘密や決まり事がある。蒼の長も、西風で決まった事には口出ししなかったじゃないか！
でも……、頭では分かっていても、胸に何かが吹き抜けるのが治まらなかった。ソラの肩の冷たさが指に残っている。
蒼の長が…、ナーガ様が…、隠して話してくれなかった事がある…。僕達に……！
＊＊＊
「シンリィ、おいシンリィ!!　止まれったら!!」
ルウは狭い洞穴を凄い早さで進むシンリィを呼んだ。しかし羽根の子供は猫に怯える仔ネズミのように、必死で逃げている。
「もう大丈夫だったら！　あいつら、あの細い入口は通れないって！」
ルウはやっとシンリィに追い付いて手首を握った。
「おおぅ…」
背筋を、シンリィの感じていた恐怖が走って行った。
「そんなに怖かったんか。確かに凄い形相のおっさん達だったな。大丈夫だ、私が付いている。次、遭ったらやっつけてやる。だから怖がるな、な…」
狭い岩穴で、羽根の子供を腕に引き寄せて、背中をポンポン叩いた。洞穴の天井が広くなっていて、僅かに明るい。地上に通じる縦穴があるんだろう。
「さっきの洞穴の入り口は見張られているだろから、このてっぺんから出られればいいんだけれど…」

それにしても、初対面の男達にいきなり、
「蒼の一族の有翼人だ!!」
って怒鳴られて大勢で追っかけられたんだから、そりゃ怖かったろうけれど、シンリィの怯え方はちょっと異常な気がする。
「一人前になる為に里を出たんだろ？　まったく…」
シドとソラも心配だし、早く戻らなくっちゃ。シンリィを前に、二人ソロソロと縦穴を登り出した。
「そう言えば、その羽根って遺伝なんか？　あんたのお祖母さんも白い羽根あるし。長の家系だけか？」
いつもは他愛ない会話でも、シンリィは何らかの応えをするんだけれど、今は無反応だった。
「あんたでも、触れたくない話題、あるんだね…」
縦穴は何とか通れて、月明かりの尾根に出る事が出来た。
「大丈夫か？　シンリィ。ここはどこだろうな？　夜営地と同じ尾根ならいいんだが…」
「二人は、僕らの部落に来ているよ」

後ろからの急な声に、ルウはシンリィを後ろに回して、徒手を構えた。月明かりの下にいたのは、赤毛がかった黒髪の、黒い瞳の少年だった。
「ここに出ると思って待っていたの。あの洞穴、小さい頃の僕の秘密基地だったから」
「二人って…、シドとソラか」
「うん、具合が悪そうだったので、隊長が部落で休むように勧めたんだ」
「……」
「僕、案内するよ。こっち」
「……」
「…？　早く…」
「行けないな」
「えっ？」
「シンリィが怯えている。こいつの勘はハズレがない」
「……」

少年は暫く困惑していたが、顎を上げて話し出した。
「…あの、お願いがあるの…」
「…なんだ？」
「僕の、妹二人は、黒死病で亡くなったの」
「……」
「その事で母さんは、今も時々空中を眺めている。族長の所は七人の跡取りがいたのに、皆あっという間に死んじゃった。村全体が怖くて哀しくて…。今も、怖い。またあの災厄が来たら

と思うと、怖くて夜中に目が覚める…」
「……そうか…」
「その羽根が、黒死病を克服出来るヒントを持っているって、大人のヒト達が言っているの。お願い、部落に来て！」
少年は、シンリィに迫った。シンリィは眉根を寄せ、怯えた目で後退りする。
「ちょっと待て！」
ルウが割って入った。
「こいつがヒントを持っていたとして、お前が今、怖いのを克服出来るのか？」
「…？　どんなヒントかも知らないのに、分からないよ」
「じゃあもしかして、こいつが酷い目に…、もしかして命を落とすような目に遭うって分かっていても、お前は来いって言うか？」
「えっ？」
「大人が、ヒントだなんて濁してはっきり言わないのは、そうだからじゃないのか？」
「……」
「お前も薄々そう思っているんだろ？　お前、そこに目をつぶったら、これからもっと眠れない夜を送る事になるぞ！」
「……」

不意に松明が辺りを照らした。
「ヤン、でかした!!」
いつの間にか、数人の男が三人を取り囲んでいた。石弓をルウに向けている。
「羽根の子供だけでいい！　そっちの娘は動けなくしちまえ！」
「やれるモンならやってみろ!!」
ルウは靴を脱ぎ捨て、脚(きゃく)を構えた。
「ダ、ダメ！　やめて…!!」
ヤンが大人の一人にしがみ付いて、皆が一瞬怯んだ時、急に辺りが明るくなった。
「・・?!」
松明の光じゃない。もっと、強くて、揺るぎない光！
シンリィがぱぁっと笑顔になって、両手を広げて空に突き出した。一同が見上げる間もなく、空から白い塊が降って来て、一瞬でまた急上昇した。
再び暗くなった地上には、羽根の子供と女の子の姿はなかった。
「ま、魔物に、喰われたの?!」
腰を抜かしているのはヤン一人だ。男達は空を見上げて悪態を付いている。

「ちくしょう!」
「あの、草の馬め!!」
「くさのうま…??」
＊＊＊
――あ―ははは―は――
――あ―ははは――
耳のつうんとするのが治まると、ルウの頭に笑い声が響いて来た。凄い速さの風が頬をなぶっている。
裸馬に乗っているのは分かる。前にシンリィ。小さい手でタテガミをぎゅっと掴んで、羽根もきゅっとたたんでいる。
「笑ってたの…お前か?」
振り向いたシンリィは、今まで見たことのない生き生きとした顔をしていた。
「お前……」
ここはどこだ? よく分からない。地上が見えない。空なんだろうけれど、雲か、モヤの中か?
馬は…、白いが、草で編まれた草の馬だ。薄緑の上に白い粉をまぶしたような、砂地の白蓬(しろよもぎ)の色。蒼の里に、こんな色の馬、いたっけ…?
我に返ると、急激に寒気が来た。手足が痺れて痛い。
「シンリィ…、ちょっと、寒い…」
シンリィは馬の首を下に押し向けた。
馬は素直に急降下する。
――急降下する……
――急降下する……
――って、どんだけ高い所にいたんだあ?!!
また耳がヅンヅンした。
「おおい、シンリィ、もちっとお手柔らかに…」
と言った所で口の中を噛んだ。
馬が急停止して、シンリィの頭に顎を打ち付けたのだ。頭のてっぺんを押さえて振り向くシンリィに、
「悪い…ゴメン」
と言いながら、間近の地上を凝視する。月明かりに浮かぶシルエットは、さっきまでいた尾根筋の山影とは違う。
「・・何処だ?」
ルウの問い掛けに、シンリィは小首を傾げて馬を水平に飛ばした。山ではなく、深い森だ。前方に月を映す三日月型の湖が見えた。
「ここ、知ってる…」
数か月前、西風の里を出発した翌日くらいに、夜営した森だ。じゃ、あの山よりずっとずっと南じゃないか。勝手に先に飛んじゃったのか?

「戻ろう、シンリィ。シドとソラが心配だ。まあ、あの二人ならナーガと違って、狼狽えてヘマはしないだろうが…」
しかしシンリィは地上の一点を見ていた。
木々がほのかなオレンジに照らされた場所がある。
「誰か居るな。ちょっと火に当たらせて貰ってっていいか?」
ルウの芯まで冷えきった手足は、火を欲していた。
シンリィは馬の首を押して器用に誘導して、地面に降下した。修練所で乗馬訓練も免除されていたのに、いつの間にそんなの覚えたんだろう。

草の馬は離れた茂みに待たせて、そおっと明かりに近付く。森の中の小さな広場に焚き火が焚かれていたが、誰もいない。荷物らしき物はあるから、何か用事で外しているだけか?
「誰か来たら謝ればいい」
ルウはそそくさと火にすり寄った。かじかんだ指先に感覚が戻る。
「ふぃ〜、生き返った」
シンリィは突っ立ってキョロキョロしている。ルウもひと心地付いて、不自然に気付いた。
「あれ?」
今は冬の頭の筈なのに、森に若草の匂いが満ちている。空気も何か生温い。南に下ったせいだけじゃない。木々の下生えの中の白いイチゲは、春に咲く花だ。
「……?」
ルウは立ち上がって、シンリィの側に寄った。何か変だ…?
ふるる…と、馬の声がした。そちらを見ると、森の奥で六つの目が光って、三頭の草の馬がこちらを見ていた。
「蒼の一族がいるのか?」
ルウはちょっとホッとして馬をよく見ようと近付いた。一頭だけやたら大きい。

先にシンリィが、電気が来たみたいに振り向いた。
背後に衣擦れの音。
「ほぉ……」
焚き火のオレンジに照らされて、すうっと立つ水色の妖精。
「小鬼が、いる……」
「・・!! お師さん??」
ルウは言いかけて詰まった。お師さんだ…。お師さんには違いない…けれど…?
水色の妖精の背中には、鷹のような薄茶の羽根があったのだ。
「…人違いだ…、迷い鬼…」
有翼の妖精は、戸惑うルウをちょっと見てから、シンリィに

視線を移し、目を見開いた。
「……」
シンリィは口をキュッと結んで、水色の妖精を凝視している。ルウが何か聞こうと口を開いた所で、森の奥で小鳥みたいな声が響いた。
「待って、待ってよぉ！　カワセミ様ぁ!!」
不意に、夜の森が昼間のようになった。いや、明るくなった訳ではない。飛び込んで来た空色の長い巻き髪の女性…、そのヒトの輝くようなオーラが、夜の森を照らしたのだ。
（ナーガの母者？？）
いや、違う…、そっくりだけれど、立ち居振る舞いが全然違うし、第一、白い羽根がない。
「あれぇ？」
女性は、はなだ色の瞳を見開いてキョロキョロした。
「何かいる？　カワセミ様？」
彼女にはルウ達が見えていないようだ。
「…別に…」
カワセミと呼ばれた男性は、子供達から視線をそらして、引きずっていた落ち枝を焚き火に放り込んだ。そうして二人の子供の存在に気付いていないような素振りで、女性と隣合わせで腰掛けた。

＊＊＊

ルウは、シンリィと並んで茫然と突っ立っている。何が何だかさっぱり分からないが、胸がドキドキして、喉が詰まりそうだった。
「あのさあ…」
水色の妖精はシレッと巻き髪の女性に話し掛けた。
「モエギの子供の父親は、やっぱりハトゥンかなあ？」
女性はキョンとして答えた。
「まあ、そうでしょうね。この先シドとソラがいかに頑張ったって、ハトゥンの方が一枚上だわね」
カワセミはチラリとルウを見た。オレンジの瞳の娘は、高速で何回も頷いた。
「うん、ボクも、そう思う…」
カワセミは愉しそうに笑った。
「ねぇ、ユユ…」
一拍置いて、カワセミはまた聞いた。
「じゃあ、…ボクの、子供を、生む、のは、誰？」
「へっ？!!」
女性は目を丸くして、たちまち耳まで真っ赤になった。
「え？　え？　ええまあ、そりゃアタシよ！　アタシは貴方の妻ですから！　え？　今？　今ですかあ?!　ダメよ！　あの

子達もいるのに!!」
「当たり前だ、聞いてみただけだ」
水色の妖精はまた可笑しそうに笑った。お師さんって…こんな顔して笑うんだ……。
ルウはそっと隣を見た。シンリィは……、大きな瞳を更に大きく見開いて、口を半開きにして、ユユと呼ばれた女性を凝視している。身体中小刻みに震わせて。
そうだ…、どういう道筋でここに来られたのか、分かんないけれど、・・・ユユ・・・この女性はきっと、シンリィの一番逢いたかったヒト……なんだ…。

「それで、ユユ…」
カワセミは焚き火に照らされながら、ユユと呼ぶ女性をじっと見た。
「キミは、どんな子供が、欲しい?」
ルウは息を止めてシンリィを見た。シンリィはただただこの女性の全てを感じ取ろうと、じっと集中している。
「えっ? なに? いきなり? …そうね…」
ユユは顎に指を当てて考えた。
「うん! カワセミ様の子供時代にそっくりな子供が欲しい!!」
「はあ?! なんだそりゃ?」

「だって、カワセミ様はアタシの子供の頃を知っているのに、アタシは知らない。不公平だわ」
「はあぁ?」
「だから、カワセミ様が、七つのアタシを包んで育ててくれたように、アタシも小さいアナタを包んであげたいの。どう?」
「……」
さすがのお師さんも黙らされてしまった。
母者も、蒼の里の人々も、シンリィの母親のぶっ飛び具合をよく話してくれたが、これは聞きしに勝る。
本当に、このヒトに、シンリィを育てさせてあげたかった…。
「でもさ…」
水色の妖精が気を取り直して話を続けた。
「それはユユがどうしたいかだろ? 今、子供が目の前にいるつもりになって、どういうヒトになって欲しいか言ってみろ」
「へぇ? 何でまた? ふうん、そうねえ…うーん…」
巻き髪をクルクル弄(もてあそび)びながら、ユユは脚を伸ばしてパタパタした。あ、シンリィが時々やる癖に似てる…、と思った。
「う〜ん…、う〜〜ん……、思い付かない…」
「一個ぐらいないのか?」
「だって…」

女性はパタパタしていた脚を空中でトントン打ち合わせた。
「だって、カワセミ様の子供なんて夢みたいで、それだけで十分なんだもん。あっ思い付いた！」
「思い付いたか？」
「うん、もし、目の前にその子がいるとしたら…、でしょ？『生まれて来てくれてウレシイ！　ありがとう！』って言うわ」
「そうか……」
「そうよ、……あら、雨？」
いつの間に、シンリィはユユの真ん前に歩いて来ていた。晴天の星空を見上げて不思議がっているその女性(ヒト)を、じっと見降ろす両目から、大粒の雫がパタパタと溢れて、彼女の足先を濡らしていた。
「ふぇぇぇ～～～」
茂みをガサガサいわせて、二人の少年が現れた。上半身裸で水浸しだ。ルウは二人の幼い顔を見て、また仰天した。
「あらあら、早く焚き火にあたりなさいな」
シンリィは後ろに退き、少年達は焚き火の前で丸くなった。
「言い付け通りの回数、水被って呪符を唱えて来ましたよ」
「数をごまかしていないだろうな」
「ちゃんとやりましたよ…多分」
「これって何か、意味あるんですか？」
「大長から、キミ等のあらゆる可能性を試しとけって言われているんだ。不満があるならやらなくていいぞ。自分の可能性を閉ざすだけだ」
「……は…い…」
「…す…みません…」
「さ、シド、ソラ。もうすぐスープが温まるわ。一杯食べて、元気出して。早く『りっぱな男』になって、故郷に錦を飾るんでしょ」
「錦なんて、そんな…」
「僕達はただ…」
「ん・ん？　なあに？」
「僕達は、僕達の為に一生懸命になってくれた、長様やナナ様に…」
「恩返しとか言うなよ」
カワセミが二人の額に手を当てながら、ピシリと言った。
「…『歓び』…、長様がモエギ様に言っていた。貴方の成長が私の歓びですって。僕達も、そうなりたい」
「あら、なら、アタシも入れて。貴方達が立派になってくれたら、アタシ凄く嬉しい。ね、カワセミ様もそうでしょう？」

「まあな…」

凄いな、このユユってヒト…。あの孤高のお師さんがペースに巻き込まれている。さすが、お師さんの連れ合い…。ルウはこのヒトを見られただけでも、来た甲斐がある気分になった。

＊＊＊

細いいなきが森の奥から聞こえた。

「…!!」

カワセミは顔を上げたが、他の三人には聞こえなかったようだ。有翼の妖精は、少年達の額から手を離して立ち上がった。

「ソラ、キミは明日から水ごりの回数を倍に増やせ。シド、キミはその時間、ユユに付いて騎乗訓練。…以上。ボクは見回りに行く」

「えっ？」

「ええ～～？」

「もう、スープ温まるわよ」

「先に食べていてくれ。ボクは要らない。今日は術が逃げる。ダダ漏れだ…」

水色の妖精はルウ達をチラリと見て、とっとと茂みに分け入った。ルウもシンリィの手を引いて、慌てて追い掛ける。

焚き火が見えなくなる辺りで、二人が乗って来た白蓬(しろよもぎ)の馬が駆け寄って、今一度いなないた。

「ふうん…」

カワセミはその変わった色のタテガミを撫でながら、淡い赤の瞳を覗き込んだ。

「……ふん…。トンでもない奴だな。過ぎた能力だ。お前、どんな『生まれ方』したんだ？」

独り言のように、馬にだけ話し掛ける。

「お前、この力は封印して貰え。ボクか、大長の所へ行け。…お前の生きる時代にも……いるんだろ？」

水色の妖精は馬から子供に視線を滑らせて、緋色の羽根を切なそうに見つめた。そして目を伏せて踵を返した。

「さあ、もう、行け…」

「お師さ…カワセミ長!!」

ルウが意を決して追い掛けた。

「喋るな!!」

水色の妖精は後ろ向きのまま鋭く一喝した。うなじも肩も、触れば切れる刃物みたいな気を発している。

「何も喋るな!!　例え未来に何があり、その子の運命がどうであっても、……喋るな!!」

そう、確かにルウの頭の中にはその考えが駆け巡っていた。

もし、この後の災厄をこのヒトに伝えたら…、少なくとも、シンリィの母親は助けられるんじゃないか？　シンリィが、あの天真爛漫な母親の元で、幸せな子供になれるんじゃないか？

ルウの頭の中に、幸福な親子三人の姿がフラッシュした。

怒られても…、たとえ破門になったって、言葉を発しさえすれば、このヒトの耳に入れる事が出来る！　決意して口を開こうとしたその時…、震える手を小さい手がキュッと握った。

「……」

羽根の子供はルウを見上げて、小さく笑った。

「…その子は、『今』が、いいそうだ」

水色の妖精は、後ろを向いたまま穏やかな声で言い、自分の『今』を生きる為に、焚き火に向かって歩き出した。

舞い上がる馬の上から、小さくなる有翼の妖精を見つめる。森の中のオレンジの灯も…。

「シンリィ…、あんた、『今』で、良かったの？」

シンリィが里で普通に育った幸せな子供だったら、留学して来た自分と逢っても、…今の二人には成り得なかった。凍える寂しさ持った寄る辺ない子供でなかったら、こんなにも心が触れあう事はなかった。私は自分を見つける事は出来なかった。今の自分はなかった……。

「ありがと……シンリィ…」

ルウは馬上の後ろから、羽根ごとシンリィに抱き付いた。

ヒトって、色んな運命が絡まって、出逢ったりすれ違ったりするんだ……。

三峰の山。最初の夜営地より下った谷の洞穴。入り口付近で小さな明かりが見え隠れしている。

「ルウ様、シンリィ！　シドです。話は付きました。大丈夫だから出て来て下さい！」

シドが細い裂け目の奥に必死で叫び続けている。

「この奥はどれだけ深いんだ?!　本当に危険な場所はないんだろうな?!」

苛ついて、後ろにいる、見張りに立っていた三峰の男達に怒鳴る。

「ちょっとは落ち着け。子供の頃入った者の話では、長いだけの平坦な洞窟だ。お前の声が届けば、すぐに出て来るだろう。それより約束は守ってくれるんだろうな」

「ああ、僕らは女の子に手出しされなきゃ、文句は言わない」

「羽根の子供は我々に渡してくれるんだな」

「預けるだけだ。聞くなり調べるなり好きにするがいい。それであんた等の気が済むのなら」

「シド!!」
　思わぬ方向からの声に、シドと男達は外を振り向いた。オレンジの瞳の娘と羽根の子供は、外にいた。
「ルウ様?!」
「シド！　出任せでもそんな事言うな！　シンリィを好きにすりゃいい、なんて」
「出任せじゃないですよ」
　シドは大股で近付いて、ルウの両手首を掴まえた。三峰の男達がシンリィを取り囲む。
「シンリィ!!　シド、シンリィを…!!」
「ルウ様…、ソラが、倒れたんです」
「えっ？」
「今、彼等の部落で世話になっている。このヒト達は羽根の秘密を探っているだけだ。好きに調べさせればいい。命を取ったりはしないでしょう」
「そんなの、分からない！」
　ルウは掴まれた手を振り払おうとしたが、いつもは好きにさせてくれるシドが、今は手が白くなっても離してくれなかった。
「シド…？　シド!!」
　シドは、ルウが見た事もない、血の気の引いた、能面のような顔で言った。
「だって、西風の者には羽根は無関係ですから…」
「な…ん…？」
「蒼の長様もナーガ様も、僕等に羽根の事は何にも教えてくれなかった。だから、仕方がないでしょう？　教えてくれていたら、何とか出来たのに…」
「……シド……」
　＊＊＊
「分かった、シド…」
　ルウは脱力してシドを振り向いた。
「シンリィは、私一人で、護る!!」
　一瞬油断して力を抜いたシドの手をすり抜けたルウは、素早く走って男の手を蹴り上げ、シンリィを引き戻した。
「この野郎!!」
「シンリィ、さっきの馬を呼べ！　後は何とかするから、どっかへ逃げろ！」
　しかし、シンリィは手を引かれたまま踏ん張った。
「シンリィ?!」
　羽根の子供は水色の前髪の下の大きな目で、シドをじっと見上げた。シドは思わず目を逸らせた。
　再び手を伸ばす三峰の男達を振り払い、ルウは岩壁を背中に、

シンリィの前に立ち塞がった。
「お前達…、この子に何するってんだ?!」
肩を怒らせて男達を睨み上げる。
「威勢のいいお嬢ちゃんだな」
男達は出口を固めて三人を囲んだ。
「お嬢ちゃんが護ってやるんなら、羽根なんて要らないだろう」
「なんだって?!」
「蒼の一族は強いし、神に庇護されている。それより、弱い小さい者にその羽根を寄越してくれ。それが平等ってもんだ」
「馬鹿言ってんじゃない!」
ルウは足を踏み鳴らして叫んだ。
「そんな理屈があるか!」
「ある!!」
胸元に刺青をした男が、弓をつがえたまま進み出た。
「俺の息子はその子と同じ位だった。何で、その子は羽根の下安全に生きられて、あの子は真っ黒になって死ななきゃならなかったんだ?!」
「そんな……」
無茶苦茶な理屈なのは確かだ。だけど大真面目にそんな事を言ってしまう程心を病んだヒトに、言葉は無力だ…。
「羽根を寄越せ…って、取って付けられる訳じゃないだろう…」
シドが茫然と口を開いた。せいぜいシンリィに何か聞こうとして、言葉が通じなくて諦める…、位に思っていたのだ。
「出来る!! 隊長が調べていた文敵に、羽根を渡したり奪ったりする話が記されていた。それを行う儀式の場所も」
「う、奪う?」
「今は分からないが、きっと突き止める。それまでこの子供は預からせて貰う」
「そっ…そんな…!!」
「約束だぞ。西風には約束という言葉はないのか?!」
男達はいい加減イラついて、石弓でシドを威嚇し、刺青の男がルウの髪を掴んでシンリィから引き離そうとした。
「やめろ!! 女の子には触らないって約束だろ!!」
「先に約束を違えたのはお前等だ!!」
険悪になってそれぞれが手を出しかけた時…、ルウの後ろから二本の手が伸びて、刺青の男の腕にしがみ着いた。
「…?!」
皆、一瞬呆気に取られる中、羽根の子供は男の腕にぶら下がって、ルウの髪を離させた。
「ふん! 自分から来てくれたわ…い……!! …?」

「どうした？」
シンリィを抱え込んだ男が突然動かなくなったので、仲間が覗き込んだ。
「……？？」
小さい手が、男の胸の刺青に、一枚の緋い羽毛をピッタリ押し付けていたのだ。男は見開いた目玉を下に向けたまま、身動き出来ない。
「どうしたんだ？」
訝(いぶか)るシドに、他の男が小声で呟く。
「あの刺青は、アイツの死んだ息子の名と、好きだった星座だ」
「……」

一同、止まってしまった。
少しして、シンリィは羽毛を降ろし、男の掌に落とした。男は黙って羽毛を見下ろす。
「おい、どうしたんだ。妖術にでもやられたか？」
「いや……、でも…」
「どうした？」
「……思い出した」
「何を」
「こんな子供の髪を掴んで、うちの坊主とおんなじ位の子を拉致するって、どういう事なのか…を、だ…」
「おい、やっぱり妖術か?!」
残った男達がシンリィから一歩引いて身構えた。
「妖術に掛かっているのは、アンタ等だろ！」
ルウシェルが抑えた…しかし腹の底からの声で言った。
「自分で考えるのをやめてしまった、集団の暴力にどっぷり浸かって流されるばかりの妖術に。そのヒトは『当たり前』の事を当たり前に『思い出した』だけだ！」

シンリィは更に他の男達の前に出て、両手で羽根を引っ張って突き出した。
「好きなだけ毟(むし)っていいそうだ」
「…う…う……」
「どうした？　今『妖術』を使うのを見たんだろ？　その羽根の一枚一枚に、大きな力が秘められているのかもしれないぞ」
男達は目を見開いて羽根を凝視した。近くで見ると、不揃いに広がってバサバサで、ちっとも神秘的じゃない。
「百歩譲って、あんたらが羽根を手に入れたとしよう。その後どうなるんだ?!」
「…どう…なる…？」
「ちょっとは自分で考えろ！　蒼の一族に向いて振りかざして

いた『不平等』を、部落内に招き入れる事になるんだ。羽根がなければ無かった筈の、不満と奪い合いだ」
「……」
西風の娘は、羽根を差し出したまま男達をじっと見上げる子供に視線を移した。
「…一つ、知っておけ。羽根を持っていたってな、結局運命には逆らえない。ううん、逆らわないんだ。運命はすべての者に分け隔てなく降りそそぐ。違いがあるとすれば、羽根を持つ者は、あんた達みたいに欲しがらない。ただ外に向けて与えるだけなんだ。カワセミ長のように。それが羽根を持つ者の摂理だ。この子供は逆らえないその摂理の中で生きているんだ」
「……」
「それを承知なら、幾らでも毟れ」
「もう、いい！　シンリィ！　やめてくれ!!」
シドがシンリィの手を掴んで羽根を降ろさせた。冷たい手から、寂しい孤独な気持ちが伝わった。
そして子供は肩越しにシドを見上げる。大きな水色の瞳。
シドはシンリィの手を握ったまま俯(うつむ)き、三峰の男達は弓を降ろして黙ってしまった。
「シド…」
ルウが言葉を選びながらゆっくり言った。
「私はシドの気持ちを分かってやれない、…シドじゃないから。シドの気持ちはシドだけの物だから。だから自分の気持ちを言う。私は、母者と父者の次に、シドとソラが大事だ」
「ルウ…様…?」
「一日も早く立派な長になって、シドとソラに歓んで貰いたい。こういう気持ちってなくなるもんか？　私はずっと持っていたいぞ。ずっと、お前達の歓びでいたい」
「……」
「例えばお前が、ちょっと位隠し事してたって、私の気持ちは私だけのもんだ。変わらない」
「……」
「…誓う…」
「…ルウ様…」
＊＊＊
ソラはパオの天井を見ていた。
えっと…、ナーガ様のパオと違う…、そうか、蒼の里は発ったんだった…、え――と…。記憶がハッキリして、跳ね起きた。
「いっ痛ぁ～」
頭と身体中の間接がギシギシ痛む。
「まだ動かない方がいいですの」

声のする方を見ると、医師らしき禿げ頭の老人が覗き込んでいた。
「随分、無茶をしましたのう。体温が限界まで下がっておりました。まだ温めている最中じゃて」
老医師はソラの肩を押して寝かせ、分厚い羊毛を掛け直してくれた。足元が温石(おんじゃく)で囲われている。随分手厚く手当てされているな、ハッタリかました甲斐があったか。
どの位寝ていたんだろ？　シドはルウ様達に辿り着けただろうか？
「あの…」
聞き掛けた所で、外が騒がしくなった。さっきのヤンという子供の声がする。
「だから、白い魔物が降って来たんだ！」
白い魔物…、ああ、そんなこと言っていたな…。
「白い魔物が、女の子と羽根の子供を連れてっちゃったんだ!!」
ソラは跳ね起きた。
「ああ、まだ、寝ているのじゃ」
「寝てられますか!!」
「大丈夫じゃよ」
「…?!」
「魔物なんて、いやせん」
「…??」
老医師は、磨り潰した薬を湯に溶きながら、渋い顔をして呟いた。
「バカ者どもが…」
「……」
ソラは素直に薬を受け取った。
「恩を仇で返したバカ者ども…。しかし、医師として力の足りなかったワシのせいでもある。ワシが謝るから、皆を許してやってくれぬか」
「…白い魔物って？」
「草の馬じゃ」
「ええっ?!」

災厄が去り、羽根に興味を持った鷲羽の隊長が色々調べた結果、『羽根を手に入れる場所』らしきモノを突き止めた。『カゼイズルヤマ』という名の高い山。
「蒼の一族だけが羽根を持っているって事は、草の馬があれば行ける所に違いない」
隊長は草の馬に白羽の矢を立てた。
「だって、あれは、蒼の里だけで創られる馬で…」
「そう、ワシもそればかりは無理と思っておった。それを、あ

の恥知らずは…」
「…?…」
「盗んだんじゃ」
「ええっ?!!」

「人聞きの悪い!!」
戸口が開いて、鷲羽の男が入って来た。
「保護しただけだ。放たれ馬になっていたのを」
「放たれ馬?」
草の馬は蒼の里で大切に管理されている。放馬してそのままの馬なんかいるわけない。
「偶然というにはあまりに運命的な…、神の導きだと思った。数年前、ここよりうんと北の港へ絹糸を届けた帰り、海辺の林に二頭の草の馬を見付けた」
「二頭の…」
「一昼夜待ったが、主が現れない。放馬と見なして連れ帰った」
「何て事を…」
「蒼の里から探しに来れば返せばよい。何せ我等は秘密主義の連中の住処を知らん」
「……」
「しかし、ここで生まれた馬は、この部落の物だ」

「えっ…」
「このバカ息子は草の馬を殖やそうとしたんじゃよ」
「バカバカ言うな。ポンコツ医師が!」
「で、でも、草の馬って、普通の馬みたいに繁殖じゃ殖えないでしょう? 雌雄の区別もなかった筈…」
「そうか? 部落へ来た馬は、つがいだったぞ」
「まさか?」
「仲睦まじく寄り添っていたから、きっと増えると思ったんだ」
「?? 本当に草の馬だったんですか?」
「今となっては分からん。ある朝、二頭とも厩で倒れて息を引き取っていた」
「…!!」
「そして、倒れた二頭の間に、真っ白な仔馬が震えながら立っていたのだ」
「えっ、ええっ?!!」
そんな話、蒼の里でも聞いた事ない。
「所がその仔馬、トンでもない暴れモノで、誰の手にも負えず、山に逃げてしまった」
「……」
「狩っても狩っても逃げ回ってちっとも捕まらん」
「で、今日に至る…って訳じゃわい」

「我々は放たれ馬を保護しただけだ。悪事は働いていない」
「後ろめたいから子供や他所の部族には『魔物』だなんてごまかしているんじゃろが」

「それで？　ルウ様達は？」
　ソラが遮って、肝心の事を聞いた。
「見た者の話によると、追い詰めた子供二人を白い塊が一瞬で拐って行ったたそうだ」
「…馬が？　…馬の意思で？」
「どう考えても、馬が二人を助けた…って図だろ？　うちで生まれた馬なのに。どうしたって、草の馬は蒼の一族と繋がっているんだな」
　鷲羽の男は溜め息混じりにぼやいた。草の馬を自由には出来ないってだんだんに気付いて来たんだろう。三峰の村人が秘密にしていたのはそれだったのか。白い草の馬…。
　しかし、草の馬を持っているだけで羽根が手に入るのなら、蒼の里は全員有翼人だ。そんな事位分かるだろう？　そんなソラの内心を知ってか、鷲羽の男はポソリと言った。
「我々は、蒼の一族のように、なりたかったのだ…。草の馬を持って…」
「……」

「災厄に踏み潰され怯える小さな存在でなく、災厄に立ち向かい、人々を救う、強い存在に…」
「……」

　今一度外が騒がしくなった。
　野太い男達の声に混じって、女の子のよく通る声がした。
「ルウ様！」
　ソラは今度こそ身を起こした。
「もう起きられます。連れの所へ行かなくては」
　鷲羽の男が腕を出して肩を貸した。
「お前は度胸がある。どこまでハッタリだったんだ？」
「まあ、概(おおむ)ねです。物事の核心を知らないのは、貴方がただけじゃない。蒼の一族だってね」
「え…？」
　男の疑問顔には答えないで、ソラは老医師を見た。
「世話になりました。随分楽になった。貴方は名医です」
　老医師は目を伏せて禿げ頭を振りながら、戸口のソラを見送った。
「皆を許してやってくれ…」

＊＊＊

　ソラと鷲羽の男が外に出ると、松明に照された広場に、シド

とルウシェルがいた。
「ソラ!!」
ルウは一直線に駆け寄って来た。
「倒れたのか？　無理すんな。座れ、座れ、…誰か、椅子持って来い！」
「大丈夫ですよ」
ソラは初対面の部落の者達を顎で使う娘に苦笑いしてから、シドに向いた。相棒は酷く疲れた顔をしていた。
「心配かけたな…。シンリィは？」
「…あっちだ」
シンリィは案内されて、族長の家へ向かう所だった。
「私も行く!!」
ルウが駆け寄った。しかしシンリィは、ルウの両手を握って口をキュッと結んだ。
「…一人で…行くってのか？」
羽根の子供は背中を向けて、一人で左右に揺れながら歩いて行った。
「そんなに突っ張って急ぎ足で一人前にならなくてもいいのに」
鷲羽の男は、ルウの言葉に振り向いた。
「羽根があっても、普通に男の子なんだな」
「羽根があるからだ。いつまでも羽根に護られていて、ちっとも自立出来ないって。悩める男の子なの、あいつ…」
「……」
「おっさん、羽根ってなんか凄いモンだと思ってんだろけど、そうでもないぞ。すぐ転ぶし、木に登りゃ落っこちるし、触りたがる女の子から逃げ回んなきゃなんないし…」
「……」
「そんなら頂戴よ！」
真剣な目を見開いたヤンが叫んだ。
「僕が黒死病にならなくなったら、母さんを安心させてあげられる！」
「うん…、母さんは安心だろうな。安心して死んで行ける」
ソラが静かに言った。静かな声だけれど、周囲の何人かが振り向いた。
「シンリィのお母さんもそうだったろうな…」
「……」
「自分だけが大丈夫って…、実はそんなに重宝な事ではないんじゃないか？」
「なあ…」
口をつぐんで考え込んでいたシドが、少年にそっと話し掛け

た。
「ヤン、『今』は、どうだ？」
「えっ？」
「『今』だよ。災厄を潜ってヤンもお母さんも生き残った。それだけじゃ駄目か？　足りないか？」
「でも、ずっと不安だよ。羽根があったら安心だって知っちゃったから。…あれ？」
「羽根の力を知っていなかったら、ヤンの『今』はそこそこラッキーなんじゃないのか？」
「……」

「あ…」
　ルウが族長の家を見た。戸口に老人が立って手招きしている。ルウが駆け出し、鷲羽の男とシドとソラも後に続いた。
「シンリィ！」
　羽根の子供は肘掛け椅子にうつ伏せてぐたっとしている。
「大丈夫か?!」
「ワシに色々伝えようと、頑張ってくれたのじゃ。ワシが受けとるのが下手でなあ」
「叔父貴、聞けたのか？　羽根を授かる方法。カゼイズルヤマの場所」
「この子が何も知らない、と言う事は分かった」
「…何てこった。骨折り損か…」

「蒼の一族も、ほとんどの者は知りませんよ」
　ソラがシレッと言った。
「トップシークレットみたいですからね。里でも長しか知らない感じです。その長達が羽根を持っていないんだから、そんなに融通の利くモノでもないんじゃないですか？　そもそも里だって二人の長を黒死病で亡くしているんです。貴方がたが思う程、万能じゃないんですよ。むしろ、持っている者に同情的な空気でしたね。なんだか羽根を背負うと、責任と厄介も背負(しょい)い込むみたいで」
　そして鷲羽の男を見る。
「これが僕の知っている全てです。カゼイズルヤマの情報と、どちらが貴方に必要でしたか？」
「…意地の悪い事を言うな」
　男は上目でソラを睨んだ。
「それ、最初に言ってくれればよかったのに…」
「素直に聞いてくれましたかね。羽根を得る事だけを考えているヒトが」
「…分かった、お前の言う通りだ」

鷲羽の男は外を見た。部落の男達が夜を明かして待っている。
「皆に説明せねばなるまい。確かに、骨が折れる。ずっと、羽根を得る方向で来たからな」
「…わしも行こう」
「叔父貴?」
「その子がわしに一所懸命伝えようとしたのは、以前この部落へ来た…、その子の『父親』の気持ちだ」
「……!!」
「至らぬまでも、皆に伝えよう。それがわしのやるべき事じゃ」
「…俺も、だ…」
鷲羽の男は地面の一点を見つめて呟いた。さっき、その子供の母親が、災厄で亡くなったのを聞いた…。即ち、あの有翼人の妻が…。

族長と甥、二人連れ立って外へ出た。
ソラが羊毛の上にドッと座り込んだ。
「おい、ソラ、大丈夫か?」
ルウが支え、シンリィが正面に回って大真面目な顔で額に手を当てた。
「はは、治癒の術をやってくれるって? お手柔らかにな、シンリィ」

ソラは片目を開けてシドを見た。彼はずっと複雑な表情でソラを見つめている。
「ルウ様、薬湯を取って来て貰えませんか? 右のナツメの木の前が医師の家です」
「…ああ、分かった、待ってろ」
ルウはシンリィの手を引いて飛び出した。
室内にソラとシドが残る。
「シド…」
「……」
「シド、サンキュ…」
「何で、礼を言う」
「君の横だから安心して倒れられた。他の者だったら、僕を放って行ってくれなかったからな」
「……」
「さすがだ、相棒」
「…よしてくれ…」
「シド……」
「ソラ、君は本当に抜け目がない。無駄もない。僕は無駄だらけだ。君みたいに割り切ってもいなかった。ナーガ様達が羽根の秘密を話してくれなかった事に、わだかまっていたんだ」
「……羨ましい…」

「何が？　嫌味か？」
「君は、わだかまっていた分、僕よりずっと情を込めて周囲のヒト達と関わっているんだ。ヤンに対してだって、僕はあんな風には言ってあげられなかった」
「……」
「僕が無駄がないのは、冷たいからだ。自分でそう思う」
「まさか…」
「ねえ、シド、僕達、厩(うまや)で育った。教育も受けられず」
「…ああ…」
「蒼の一族のエリート、ナーガ様とか大好きだけれど、どうしても一歩引いて客観的に見てしまう…、僕は」
「そんな…」
「だから、そんな風に、対等に腹を立てたり出来る君が、羨ましい」
「……」
二人は暫く色んなモノに想いを馳せた。
「なあ、ソラ…」
「ん…」
「僕達、今まで、足して二で割るような存在だったけれど…」
「うん…」
「それぞれがしっかり立って、掛けて何乗にでもなれる存在になれたらいいな」
「…うん」
「薬!!」
タイミングよくルウとシンリィが飛び込んで来た。
タイミングを計っていたのかもしれない。
＊＊＊
「噛みつきませんでしたよ。優しい馬じゃないですか」
族長が用意してくれた寝床で不覚にも寝過ぎて、シドが目を覚ますともう日中だった。広場に繋がれた馬を、ヤンが世話してくれている。
「有り難うな。でもソラのパロミノは、たまにホントにフェイントで噛み付くから気を付けろ」
ソラはまだ医者の所だ。今日中に出発(しゅったつ)したいと言って、頑固医師に怒鳴られたらしい。
「子供達は？」
「岩尾根の方へ行きました。粕鹿毛に二人乗りで。昨日靴を置いて来ちゃったままだったって」
「そうか」
ヤンが馬の首をすきながら、思い切った感じで言った。
「あの…僕、ちょっとでいいから、馬に乗っけて貰えませんか？」

「族長がいいって言えば構わないよ」
「・・!! 聞いて来ます!!」
ヤンは馬ブラシを放り出して駆けて行った。ルウが粕鹿毛で飛び上がるのを見て、そそられたんだろう。どこの部族だって男の子は飛ぶのが大好きだ。自分もそうだった。
「ツバクロ長の馬で勝手に飛んで、大騒ぎになったっけ」
今から考えると、トンでもない事をしでかしたモンだけれど、叱るより先に、才能を見つけて歓んでくれた。
「ちゃんと大事にして貰っていたんだよな」
一つの隠し事を知った位で動揺するなんて…。しみじみ反省している所に、ヤンが紅潮した顔で戻って来た。
「命綱付けたらいいって!」

鞍に結んだロープを腰ベルトにくくり付け、緊張顔だったヤンが歓声を上げる。ちょっとサービスして山の向こうの地平線を見せてやろうと更にジャンプした所で、尾根の岩場にルウとシンリィを見付けた。
「まだ見つからないのかな」
「手伝いましょうか」
二人が馬を降ろして近付くと、ルウは裸足のままだったが、屈んで左足首に手を当てていた。

「あっ」
ルウは立ち上がって、妙に動揺した。
「足、怪我したんですか? 見せてください」
シドが二、三歩ルウに近付いた所で…、
「だから、そんなに便利にボクを呼ぶな…」
不可思議な声が後ろでした。
……??…。
この世に居ない筈の声だ。
「だってお師さん…、お師さんが言ったんだもの。こっちのお師さんに封印して貰えって」
「ああ……そんな事、あったな…」
シドが恐る恐る振り向くと…、羽根は無いけれど、紛(まが)いもない水色の妖精がそこにいた。
「カ・カ・カワセミ長!!」
「ボクはとおに長じゃない。シドか、何でここにいる? ルウシェル?!」
「ごめん、お師さん、周囲に気を配るの、忘れてた」
「迂闊だな、減点…」
「…ルウ様?」

「かっ、隠してた訳じゃないよ！　私、最近までお師さんがカワセミ長だなんて知らなかったんだからっ！　あっ、ナーガのおっさんもノスリ長も知らないからなっ。隠してるんじゃないぞっ」
　昨日の事があって、さすがのルウも気を使っている。
「お師さんって？」
「だから、お師さんはお師さん。私にあらゆる事を教えてくれるお師さんっ。羽根の摂理とか…」
「いつの間に」
「蒼の里で…」
「内緒にしていたんですか？」
「……」
　罰悪そうに困っているルウに代わって、カワセミが尊大に言った。
「修行は人知れずするモノだ。ひけらかす馬鹿者なら弟子に取らない。その位、解れ、シド！」
「はい…」
　叱られたが、何だか懐かしくて甘酸っぱかった。
　旋風が起こり、ヤンが悲鳴を上げて尻餅を着いた。シンリィがお構いなしに白い馬を呼んだのだ。
「こいつが…？」
　ソラに話は聞いたが、見るからにおかしな草の馬だ。
　浜辺に咲く白濁した白蓬(しろよもぎ)の色。草で編まれた…というより、細い枯れ草を丸めて固めたようなグシャグシャな毛並みだ。タテガミも尻尾も折れ曲がってグシャグシャ。そして瞳は、シンリィの羽根と同じ薄緋色だ。
「カワセミ長…、数年前に、海辺の林で三峰の部落人が拾った二頭の馬から…生まれたそうです」
「うん…」
　カワセミは、自分の右肘から掌を馬の鼻梁にピッタリ付けた。
「ボクの馬と、ユユの馬だよ…」
「……」
「二頭とも寿命が残り少なかったから、鈴を外して自由にしてやったんだ。里へ戻るより、野馬みたいに睦まじく生きろって」
「……」
「こんなのを遺してくれていたんだな……、アイツら…」
　馬は静かにカワセミにピッタリくっ付いている。
「草の馬が、子供を生むって、あるんですか？」
「草の馬の真実は、蒼の一族も全ては知らない。でも、まあ……驚きだな…」
　カワセミは馬の頬に両手を添えた。

「一度は翔んでくれた。それで十分だ、有り難う。でも、過ぎた力だ。封印するよ、いいね…」
馬は大人しく目を閉じた。頬を挟んだ両手がポウと光って、すぐに消えた。
＊＊＊
シンリィの白蓬と、ルウがヤンを乗せた粕鹿毛が、空中を競争している。
「上手いもんだな、鈴もなしに裸馬で。里の教習は受けていないのに」
「ボクも里の馬術修練は苦手だった…」
カワセミとシドは岩山の上に並んで腰掛けている。
「執務室の皆にはまだ隠れているんですか？　僕、言っちゃうかもですよ」
「シンリィが里から旅立ったし、もう構わないさ…。三日前、ノスリに会った」
「そうですか、よかった。じゃあ執務室も楽になる」
「いや、里には戻らない」
「…？」
「やるべき事がある」
「何か、大仕事ですか？」
「自分で蒔いた種の草刈りだ」
「…？？」
「災厄の時代、羽根を背負って無用心に闊歩し過ぎた。皆、単純に受け入れてくれると思っていたんだ」
「……」
「三峰の部落みたいに、羽根に執着する連中を作っちまった。羽根をなくしたこの姿を曝(さら)して、納得させて回るさ…」
「羽根…」
「うん…？」
「僕、好きでした。鷹みたいな真っ直ぐな羽根。いつも遠くを見ているようで、僕達をちゃんと見ていてくれた」
「…詳しい事、聞かなくていいのか？」
「いいです、好きは好きですから」
二頭が降りて来た。
「凄いよ！　ルウの馬。草の馬でなくとも飛べるんだね！　僕もいつか自分で飛びたいなあ！」
ヤンは大興奮だ。
「西風もシド達が子供の頃は誰も飛べなかったそうだ。だからこれからの事は分からないぞ」
ルウもすっかり打ち解けている。子供は話が早くていいなあ。
シンリィと白蓬(しろよもぎ)が、並んでカワセミの所へ歩い

て来た。
「どうやらこの馬は、お前の馬になるべくして生まれて来たみたいだな」
カワセミは立ち上がった。
「一生の相棒だ。ちゃんと責任持て」
指を二本立てて、軽く結びの儀をしてやる。もう以前みたいに、頭を撫でたり、抱きしめたりはしない。シンリィも背筋を伸ばして、儀式を受けた。

「三峰の部落に寄って行かないんですか?」
去りかけるカワセミに、シドが聞いた。
「あそこは必要ない。キミ達が治めてくれた」
シドはちょっと俯(うつむ)いた。殆どがソラの活躍だ。
「ユユがいたら、きっと歓ぶ。ボクもだ…、シド」
「…??」
大昔の他愛のない会話なんか忘れてしまっているんだろう。横で聞いていたルウは、後でこっそり教えてあげようと思った。
「あっあの…」
ヤンが、カワセミを追った。水色の妖精は立ち止まる。
「昔、部落に来てくれたヒトですよね。羽根はないけれど、あのヒトですよね」
「ああ…」
「僕、こんなに元気に生きています。貴方のお陰で」
「……」
「ありがとうございました」
乱暴な風が吹いて、カワセミは消えた。
「?? 僕、失礼だった?」
「気にすんな。お師さんはシャイなんだ」

部落へ戻ると、ソラが起き出して、パロミノの側で、鷲羽の男と話していた。
何だか妙に打ち解けていると思ったら、シドにはチンプンカンプンな哲学と宗教論で盛り上がっていた。大人でも、ウンチクオタクは話が早いらしい。
白蓬の馬を見て、二人とも少年みたいな目で興奮して、あーだこーだと議論し出した所で、禿げ頭から湯気を上げた頑固医師がやって来て、ソラを寝床に引き戻した。

診療所で二人になって、シドは岩尾根での出来事を話した。
「僕も逢いたかったなぁ。カワセミ長の術、見たかった」
「ん…相変わらず、凄そうな事を何気なくやっていたよ」
「ふふ…」

ソラは天井を見上げながら、自分の長い髪の先を弄(いじく)った。

「周りにワンセットに見られがちな僕らを、最初に別々の存在として扱ってくれたのは、カワセミ長だった。留学して、僕はツバクロ長に、君はノスリ長に師事したけれど、最初に西から旅したあの数日間の事は忘れない。あの頃カワセミ長に貰ったキツイ言葉の一つ一つも」

「ソラ、口答えしてはケチョンケチョンにへこまされてたな」

「後から宝石になる事って、その時には分かんないモンだよな」

「…また、逢えるさ…」

ルウの靴は見つからなかったが、何故か鞄の底に入っていた知らない靴を、シンリィが引っ張り出した。

「な……、なんだ、この…、ど・ピンク!!」

と言いつつ、背に腹は替えられない裸足の娘は、複雑な顔でちょっと大きいそれを履いた。シドに似合いますよと言われて本気で怒って夕食をボイコットしてソラに宥(なだ)められた。

こんな風な『今』に幸せを感じて、大切にしたい。

白蓬の馬はそれを教えてくれる為に生まれて来て、そして、一生に一度、『翔んで』くれたんだ……。

シンリィにとって、この世は複雑で分からない記号だらけだ。だけれど、色んな所に様々な仕掛けがひっそりと隠されている。

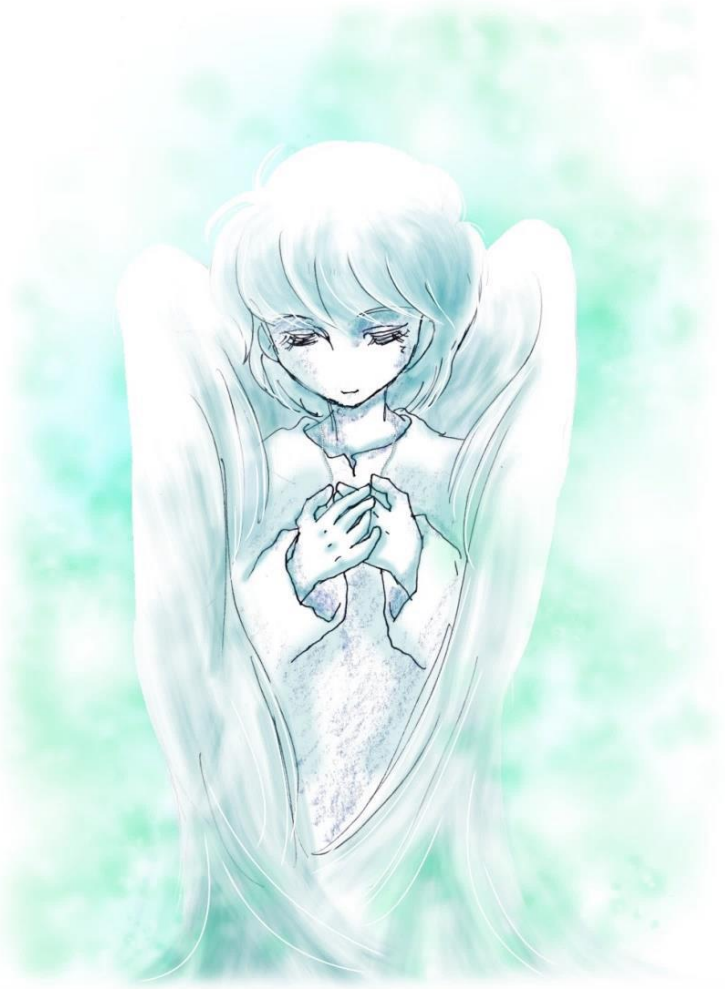
それは、とっても、面白い事だ……。

それは、とっても、素晴らしい事だ……。

それは、とっても、愛(いとお)しい事だ……。

〜おしまい〜

二〇一〇・五・十六



～ if（イフ）～

蒼い月の風出流山の神殿。

「お帰りなさいまし、兄様…」

神殿の前庭に降り立った夏草色の馬の所へ、蒼の狼が出迎えて手綱を取った。一緒に暮らすようになって、妹の自分を呼ぶ感じが柔らかくなった。ちょっと気に入っている。

「カワセミ殿は？　一緒ではなかったのですか？」

「ああ、用事が出来てね。暫く下にいるそうです」

「用事…ですか？」

「災厄の時代の事で。ちょっとした後始末ですよ」

「…羽根の、事ですか？」

「心配要りませんよ。カワセミは大丈夫です」

「……」

「それはそうと、シンリィ！　頼もしくなりましたよ」

「…まあ…」

「西風のルウシェルと、シドとソラと、力を合わせて、一つの困難を克服したんです」

「ルウシェル！　あの子！　まあまあ！」

「嬉しいですねえ。皆、どんどん立派になって」

大長は階段の所で雪を落として、月を振り向いた。

「いい月ですね、今夜はここで飲みませんか？」

「ええ」

月光が山陵に冷え冷えと影を落とすのを眺めながら階段に腰掛け、カワセミに聞いた今日の出来事を思い返す。

「もしも…、もしもか……」

「兄様？」

狼が湯気の立つウォッカの杯を運んで来た。

「あ、ああ、もしもについてね…、考えていたんです」

「もしも？」

「そう、貴方が、もし王君と出逢わなかったら…とか。ずっと蒼の里にいて、私の弟子の一人のツバクロと出逢って…」

「えっ？　何なの？　いきなり」

「恋をして、蒼の里で平凡な家庭を持って子供達を生んで、育てて…、そしたら、どんな感じの貴方になっていたんだろうなあ…って」

「そんなワタシはいませんよ」

狼は苦笑いした。
「ワタシが里で育っていたら、…多分、ツバクロ殿に惹かれていなかったわ」
「えっ?」
「そんな自信なかったでしょうね。生きる世界が違うヒトだと思っていたわ、きっと」
「はぁ…」
「それに、ツバクロ殿も、そんなワタシは目にも入らないわ」
「そんな事はないでしょう」
「いえ」
狼は白い羽根の先を眺めながら言った。
「王君と逢って、共に過ごして、様々な事を潜り抜けて、ワタシがいるんです。そんなワタシをあの方が好いて下さった」
「……」
「そもそも、ワタシが里にいたらツバクロ殿だって、人生が違っていたのではないですか?」
「まさか…」
と言い掛けて、兄は色々思い至った。
そうだ、アルが来たから…、トルイがいたから…、王君と渡り合ったから…、確かにツバクロの人生は其処此処(そこここ)で大きく変わったのだ。
「……本当だ…」
呟いた兄に、妹は微笑みながら言った。
「確かにワタシには色んな道があったのでしょうね。もしも、もしも…。でも、最初の道から繋がって、様々なモノと絡み合いながら今がある。他のもしもを選んでいたら、今あるモノは無かったんです」
「そうですね。つまらない事を言ってしまいました」
「あ…、いえ、つまらなくはないですよ。ちょっと想像してみましょうか」
妹は額に指を当てて、一生懸命考えた。
「ん〜〜。ワタシが蒼の里にずっといるんでしょ……。えっと、多分、兄様の事がずっと好きだわ」
「えっ? 今は好きじゃないんですか?!」
「今も好きだけれど、違う種類の好き。ずっと兄様だけを見て、憧れて、他の男性には目もくれないで、過ごしていたと思う。どうです? そんなワタシ…」
兄は意外と時間を要して考え込んだ。
「……悪くはないですけれど……。やっぱり今の貴方の方が、いいです」

「そう、よかった」
狼は冷たくなったウォッカを飲み干した。
「冷えちゃいましたね。中に入りましょう。取って置きのブルーチーズを切るわ」
「それは嬉しいですね」

このひとときの『今』も、一つ一つ愛しい。

明日から暫く山を降りようと思う。カワセミの行く道は険しく困難だ。一人では行かせない。自分も共に歩こうと思う。
今、出来る事を精一杯やる事で、大切な未来の『今』を護る為に。

～おしまい～

二〇一〇・五・十六